

# からだを 読み解く

## 九大病院別府病院の研究から

—11—

がんは細胞分裂の際に誤った遺伝子の情報をコピーすることで発症するとされます。大腸がんは、加齢や大腸粘膜で発がんのリスクが高い細胞で、分裂の際に



腫瘍型の大腸がん



陥凹型の大腸がん

### 腫瘍をつくらない小さな大腸がん

外科講師 江口 英利

て考えられています。

しかし近年、正常粘膜から直接発育して腫瘍を形成しない「陥凹型大腸がん」

## 正常粘膜から直接発育

の存在が提唱され、欧米でも重要視されています。進行大腸がんも最初は陥凹型

昭和大学横浜市北部病院消化器センターの工藤進英教授らと共同で研究に取り組んでいます。



江口英利講師

研究者もいます。陥凹型大腸がんの特徴は①腫瘍を形成しない。病変の大きさは別に陥凹型の方が腫瘍形成型に比べて、粘膜下層に浸潤する割合が高いことが分かっています。また、がん転移の段階と考えられるリンパ管侵襲や静脈侵襲の割合も最

も高いことが報告されています。陥凹型は「しこりをつくらず、小さいため発見が難しいですが、高頻度に存在する悪性度の高い病変」といえます。

九州大学病院別府病院は、確実に早期発見する方法を確立しようと、陥凹型大腸がん研究の第一人者で